

人とつながって

もう一度起き上がる

NPO法人北九州ホームレス支援機構にグリーンコープが連携することで、ホームレス問題は急速に私たちの身近なものになってきています。ホームレス者は現在、全国で約15000人余(2009年厚生労働省調査)、福岡市には約1000人と言われています。ホームレス問題への取り組みをすすめる程、人がなぜホームレスになるのか、その実態が浮き彫りになってきています。「ホームレス」と「ハウスレス」の違い、「家族を含めた人と関係が切れる」ことが路上生活へと追いやってしまうという事実にも気付かされています。

北九州ホームレス支援機構は20年も前から「あなたも、わしもおなじいのち」とホームレス者に温かい手を差し伸べてきました。「再び人との関係をとりもどす」、その思想と行動により路上生活からもう一度身を起し自立を果たした人の数は北九州を中心に700人程にのぼります。その中の2人に話を聞きました。

ホームレス問題を考える

4



「弱い者いじめ楽しかった」
7少年ホームレス襲撃

「襲撃された私は、もしかしたら加害者になったのだろうか」

「センターはまるで実家のように…」

Mさんは1952年生まれ、57歳。2007年の11月、約8カ月の野宿生活の後に自立支援センター北九州(以下、センター)に入所した。それからちょうど1ヵ月たった12月10日、くも膜下出血をおこして緊急手術、危うく一命をとりとめた。その後療養しながら自立の準備をはじめ、2008年2月半ば、市内の食品製造業に就職。しばらくはようす見のためセンターから通勤。6月には晴れてセンターを退所しアパートに移った。勤めはじめて以来、無遅刻、無欠勤。真面目さをかわれている。朝が早い仕事のため毎日朝4時に起きる。現在は術後の不安感への対処と降圧剤の処方のため、精神科、脳神経外科と縁が切れないが、Mさんはすこぶる元氣だ。実はMさんには軽度の知的障がいがある。センター入所後に初めてそれが分かり、「療育手帳」を入手した。それによって、自他共にMさんの「それまで」を受け止めることができた。

Mさんの人生の記憶は45歳で養子となるところから始まる。養母、10歳以上離れた姉、Mさんと同じく養子であったすぐ上の兄がやさしくしてくれ頼りだった。

地元の工業高校の電気科を卒業後、職を転々とした。手先の器用さはあったものの、行く先々で差別的な処遇を受けたことは想像に難くない。だが裏表なく一心にこなす仕事ぶりが認められ、大切にしてくれるところもあった。最後に離職したのは、2007年1月だった。たちまち生活費に困るようになり、消費者金融から借金をするが、返すあてはない。支えてくれていた姉は前年に亡くなっていた。金融業者の取り立てに追われ、ついに3月初め遺書を残してアパートを出る。

その日から野宿生活。わずかな手持ちのお金も底をつき、7月初め、死に場所を求めて昔遊んだ公園へ。そこで出合いが待っていた。「兄ちゃん、わしらの話の輪に入らんか。懇っている老人たちに声をかけられた。思いがけない優しい言葉。彼らと一緒に過ごすうちに、彼らの親切に報いるためにも生きたい、生き直したいと痛切に願うようになった。

その公園は近隣の人からの情報で北九州ホームレス支援機構の巡回ルートに組み込まれた。訪れたスタッフから薬や食べもの、衣類の支援を受け、相談にものってもらい、ついにMさんはセンター入所を決意する。

その決意表明が下記だ。そしてその言葉通りMさんは昨年再起を果たした。センターには遊びにも寄るが、主な目的はスタッフに管理をしてもらっている自分のお金を、月に3度ほど小出しにして受け取りに行くことだ。金銭管理が苦手なMさんにとって、こうしたアフターケアはとてもありがたい。スタッフはその折にMさんの健康状態を確かめている。

温かい眼差しのスタッフに支えられ、Mさんは「今が一番幸せ」と朗らかに言い切る。

時折Mさんは、軽口をたたきにセンターを訪れる。センターの戸口で「ただいま」と声をあげれば、みんなが「お帰り」と返してくれる。まるで実家に帰ったようで何よりそれが嬉しいという。

Nさんは1950年生まれ、59歳。不自由のない子ども時代を過ごした。中学1年の時父親が病に倒れ、代わって母親が家計を支えるために生命保険の外交に出るようになる。Nさんは母親を自転車の後ろに乗せて家々を回る手助けをした。兄弟3人分の弁当も作った。そんな役回りだった。

中学を卒業すると炭鉱で働き、そこにかげりが出はじめると新天地を求めて大阪に出た。ちょうど20歳。華やかな万博で制服を着こなしガイドマンをした。それが人生で一番いい時だったと言う。ついで新潟や金沢などのトンネル掘り。これは2万円という高額の日当だった。その当時、弟の私立大学の入学金30万円をポンと出したのもNさんだった。

その後、福岡市の運送業関係で10年ほど働くが、再び大阪へ。42歳の時両親の介護のために、郷里に呼び戻された。言葉で言い尽くせないほどの介護の日々を送り、両親の三回忌を済ませ再び福岡市に働きに出てきた時は50歳になっていた。建築関係の仕事に就いたが、狭心症の発作を繰り返した。53歳頃には働けなくなった。兄弟とは些細な行き違いから連絡がとれなくなっていた。1年後には車検も切れ、そのままその車を福岡市東区の道路脇に停めて野宿生活に入った。車のシー

トをベッド代わりにし、ガスボンベで煮炊きもした。風呂は週2回ゴミ焼却場の無料のお湯に往復3時間かけて通った。やがて現金収入を得るため空き缶の回収もはじめた。そうした日々が一変したのは昨年秋だった。少年たち7人が襲撃してきた。10月に4回、おちおち寝ていられた。特に10月29日未明の襲撃はひどく、Nさんは肩を木製の棒で殴られ生卵十数個を投げつけられた。あまりの凄まじさに近くの工場の夜勤の人が警察に通報、事件となった。Nさんが記憶していたミニバイクのナンバーから少年たちの身元が割れる。逮捕された少年たちは「弱い者いじめが楽しかった」と全員容疑を認めた。最年少は中学1年生だった。「結果として、私は加害者になってしまったのではないか」とNさんは自らを責めてさえる。事件後7少年のうち1人だけが両親に伴われて謝罪にきた。「この両親はホームレスの私に一人の人間として向きあってくれた。ああ、この子は大丈夫だ」とNさんは思ったという。

事件は新聞にも報道され、福岡市でホームレス支援の準備をはじめていたスタッフの目に止まった。それがきっかけとなってNさんはホームレスを脱した。現在生活保護の支給を受け、何かできる仕事はないかと探している。

私くして、早く仕事に付き自立して兄弟たちと
もとの生活を取りもどしたい。又公園では、多くの
人たちがおうえんしてくれました。その人たちに会うたびに
自分身がかかわったことを見てもらいたい。

※2004年3月に策定された「北九州市ホームレス自立支援実施計画」(2004～2008年度の5年間)の中で、ホームレス対策の中心的施設として設置された。北九州市内のホームレスに宿泊場所や食事の提供などを行い、並行して職業相談などを通じてホームレスからの脱却を促す。居室はすべて個室。市やNPO法人などは北九州市ホームレス自立支援推進協議会をつくり、センターの運営や自立支援策の検討を行っている

本紙5月号2面「地域福祉を考えるシンポジウム」の記事に「ホームレス問題を考える2」のロゴが付いていませんでした。お詫びして訂正します